

夏目漱石とクラシック音楽

(第18回)

ユンケルの送別コンサート

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

明治45年（1912）7月30日午前零時43分、明治天皇が崩御。元号は大正となった。

この年は、前号でも触れたように、ユンケルの東京音楽学校との契約が満期になり、彼がゼロから育て上げたオーケストラのタクトを振る最後の年にあたった。大正元年12月1日の秋季定期演奏会は、まさにユンケルの送別コンサートであった。この日を心待ちにしていた夏目漱石は、寺田寅彦だけでなく、小宮豊隆も誘い、3人はハガキで用意周到に連絡をとりあった。小宮がチケットを買い、漱石が寅彦の家まで迎えに行き、そのあと小宮の下宿に1時頃に寄って、2時の開演に十分に間に合うように奏楽堂に向かったのである。会場は予想通り、ごった返していた。

全体の構成は、春期の6月9日よりも凝っていた。一曲目はマスネー（1842-1912）作曲の序曲「フェードル」。「フェードル」はフランスの劇作家ジャン・ラシーヌ作の悲劇である。プログラム一覧には、「故人の追憶の為に」と但書きが入れた。というのも、このフランス人作曲家が4ヶ月前に他界したばかりで、それ故の選曲であった。ちなみに、マスネーはあの有名な「タイスの瞑想曲」の作曲者である。二曲目のグリーグのピアノ協奏曲は、今日ではポピュラーな協奏曲だが、この日が日本初演であった。三曲目はガーデ作曲の交響曲第4番。全4楽章が演奏された。

四曲目には、幸田露伴（1867-1947）の妹、安藤幸（1878-1963）がシュポーア作曲ヴァイオリン協奏曲を独奏した。彼女は姉の幸田延（1870-1946）につづく第二回の国費音楽留学生としてベルリンに留学し、帰国後は母校の教授になっていた。英文学者の安藤勝一郎と結婚した後も、子育てと仕事を両立させ、一年前の1911年12月2日に次男を出産したばかりだったにもかかわらず、大舞台に立ったのである。トリの演目は管弦楽、合唱、ソプラノ独唱、バリトン独唱による大編成のブルッフ作曲「美しきエレン」。聴衆は熱狂した。「…一雫の熱涙^{なつるい}頬に^{つた}傳ふるを覚えざりし」（『月刊楽譜』）、と批評家は絶賛した。

実は、この会場には20才の芥川龍之介（1892-1927）も来ていた。彼は友人の山本喜誉^{きよよし}司（1892-1963）に、コンサートの感想を次のように書き送っている。

…ユンケルの演奏会は面白い御座んした。土耳古の毛氈のやうに美しいガーデ^ゲエ[ガーデ]やわすれな草の花のやうに幽艶なグリーヒ[グリーグ]や、青と銀とのタペストリのやうにしみじみとしたシポーア[シュポーア]がユンケル氏のあの指揮杖のさきから宝石のやうに流れ出したときのことを考えると今でもうれしいやうな気がします。（12月6日付、芥川龍之介のハガキ）